

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿⁺源氏解読

連載第61回 第11.4.8.2節～第11.4.8.3節

2020年7月1日

小田 勝

365頁第11.4.8.2節の後に節を5つ新設するのであった。前回は、そのうちの2つをあげたので、今回は、その続き、3つの節の追加からである。

11.4.8.2''' 数詞の代名詞的使用(新設)

人を表す数詞は代名詞的に用いられることがある。

- (1) 「狐の変化したる。憎し。見あらはさむ」とて、一人は今少し歩みよる。今一人は、「あな用^{よう}な。よからぬ物ならむ」と言ひて(源・手習)
- (2) この三人はみな歌詠みのことなるものにて候ふ。(正治二年俊成卿和字奏上)
- (3) この二人、同じ時に心を発^{おこ}して、世を背かんことを言ひ合はせ給ふ。(発心集5-9)
- (4) [長能^{ながたう}ト道濟^{みちなり}ハ、歌ノ道デ] いみじくいどみかはしたるに、鷹狩りの歌を二人 [ガ] 詠みけるに(古本説話集26)

11.4.8.2'''' 一・一つ(新設)

次例のような、「一+名詞」は、「全体」「一杯」の意を表す。

- (1) ぬぎかけし主^{ぬし}は誰とも知らねども一野^{ひとの}にたてる(=野一面ニ立ッテイル)藤袴かな(堀河百首)
- (2) 白き米と良き紙とを一長櫃^{ひとながびつ}(=長櫃一杯ニ)入れたり。(宇治6-6)
- (3) 忽い声を出だして一庭^{ひとつには}を(=ソノ場所一杯ニ)走りまはり舞ふ。(宇治1-3)
- (4) [村上天皇ガ梅ノ木ヲ] 求めさせ給しに、…ひと京(=京都ジュウ)まかりありきしかども侍らざりしに(大鏡)
- (5) 一人ある男^{おとこ}の子いたづらになしたることを[願文ニ]面白う(=感動的ニ)作れり。一山^{ひとやま}の(=比叡山ジュウノ)人悲しみののしる。(うつほ・菊の宴)
- (6) 春日野より流るる水、寺のうちに掘り入れて、よろづの房^{ぼう}のうちへも流し入

れつつ、一寺^{ひとてら}の人は使ふなり。(古本説話集 47)

否定文で用いられた「一+助数詞」は、「一つもない」の意と、「一つではない(もつとある)」の両義がある。

(7) 忙しとて参らざらんが口惜しさに、出で立つを、一人うけひく人なし(=一人モ同意スル人ガイナイ)。(讃岐典侍日記)

(8) 難波江の蘆間^{あしま}にやどる月見れば我が身一つはしづまざりけり(=自分一人ダケガ沈ンデイルノデハナク、月モ同様ダッタ)(詞花 347)

なお、(7)のような「一+助数詞」は、現代語では「一+助数詞+も」と表現される。

(9) かやうのことこそは、かたはらいたきことのうちに入れつべけれど、「一つな落としそ(=一ツモ書キ落トスナ)」と言へば、いかがはせん。(枕 98)

次のような「名詞+一つ」は、「一途な…」「真実の…」の意を表す。

(10) [夕顔ノ宿ノ様子ガ] なかなかさま変へて思さるるも、御心ざしひとつ(=夕顔ニ対スル一途ナ御愛情)の浅からぬに、よろづの罪ゆるさるるなめりかし。
(源・夕顔)

(11) 女郎花秋の野風にうちなびき[浮気ノヨウニ見エルガ]心ひとつを誰によすらん(古今 230)

次のような「一つ+名詞」は、「同じ…」の意を表す(「一つ腹」)。

(12) 鳴く虫の一つ声(=同ジ声)にも聞こえぬは心々に物や悲しき(和泉式部集)

11.4.8.2'''' 概数表示(新設)

概数を表すとき、「本数詞+本数詞+助数詞」の形になることがある。次例は「三十年も二十年も」の意だが、現代語では「二三十年」というところである。

(1) この道理、よくよく参究^{くふう}功夫すべし。三二十年も功夫参学すべし。(正法眼蔵・仏性)

同 365 頁「11.4.8.3 複数名詞が表す人数」、用例(6)(7)の類例をあげる。

・三日まで参る人一人なし(大斎院前の御集・詞書)

次例の「君達」は一人(夕霧)である。

・この君達の、[私(惟光)ノ娘ヲ]すこし人数に思しぬべからましかば(源・少女)

源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（6）

（増註版 14 頁、
新全集 24 頁）普通の場合でさえ、このような別れが悲しくないことはないこと

なのに、（親の死を理解できない幼児が残されたとあっては）なおさら悲しく^①、（この悲しさは）言ってもかいたない（ことである）。きまりがあるので、通常の作法で営み申し上げるのを、母北の方は、（娘と）同じ煙になって空に昇ってしまおうと、泣いてお慕いなさって^②、御葬送の女房の車に後から追いかけるようにお乗りになって、^{おたぎ}愛宕という所に、たいそう厳かにその葬儀を執り行っている所に^③、お着きになった気持ちは、どれほどであったらうか。「魂の抜けた御遺骸を何度も見ては、やはりまだ生きていらっしやるものと思うのが、全く甲斐のないことなので、灰におなりになるうのお見申し上げて、今は死んだ人だと必ずきっぱりと思い諦めてしまおう」と、分別あるようにおっしゃっていたが、車からきつと落ちてしまうに違いないようにころび伏しなさるので、そう思っていたよと、女房たちはもてあまし申し上げる。内裏からお勅使がある。三位の位をお贈りになる旨、勅使が来て、その宣命を読むのは、悲しいことであった。

（注）^①原文の「…だに…まして…」は何を対比しているのか明瞭ではないが、「何事かあらんとも思ほしたらず」といい、後に祖母が亡くなった時には「六つになり給ふ年なれば、この度は思し知りて恋ひ泣き給ふ」とあるから、このように解した。^②原文「泣きこがれ給ひて」。「焦がれ」は「煙」の縁語（玉小櫛）。^③「…に…に」は同じ格の並置。『総覧』51-52 頁参照。